



No. 41

1996年3月発行

新潟県支部報

マイ スコープ

「……ながらウオッチング」

新潟市 松永 洸

新潟に引っ越した頃は周辺には松林や草地の空地があり、スズメやカワラヒワ、シジュウカラはもちろんのこと、オナガ、コゲラや渡りの季節にはジョウビタキ、マヒワ、ツグミと結構バラエティーに富んだ環境の我が家であったが、最近ではアパートや住宅が建ち並び松林や草地がなくなっていくにつれ、種類も少なくなり、スズメ、ハシボソガラスの天下となりつつある環境には、「ながらウオッチング」をしている私にとって、淋しい限りである。しかも、「季節感の少ない新潟市」と感じている私に、友人が、春真っ盛りの新潟市に来たとき、『いつ来ても新潟は季節感のない町だね。』といていたが、新潟市はやはり季節感のない大都会と同じになりつつあるのは淋しい限りである。と同時に、季節感のなくなってきた町に、更に季節感のないスズメとハシボソガラスしか見ることができなくなると、怠け者の私の「ながらウオッチング」



も変更せざるを得なくなった。これまでは、家の中からキビタキを撮ることもアカショウビンやブッポウソウの飛ぶ姿や声を聞くことも「居ながらにして」できた。週休二日制となって時間的余裕もできたようだが、何故か今までも週休一日制(?)で、この一日にいろんなことをやろうということから、ここでもながらウオッチングとなる。植木や山野草の手入れをしながら、溪流釣りをしながらカワガラスやヤマセミを見たりと、ながらウオッチングは一石二鳥。これからの季節は、山菜取りをしながら、ノジコの囀りを聞いたり、溪流釣りをしながらオオルリやミソサザエの囀りを聞いたり、姿を見たりと、「ながらウオッチング」を楽しもうと思う。写真のスズメとヤマガラは、家にいながら給餌台に来たものを写したもので、ヤマガラには環境庁バンドがつけられた夫婦者のようであった。



夏鳥が危ない

研究部 小池重人

春がきて山々に青葉が広がるころ、夏鳥が南の越冬地から飛来し、私達に美しい姿を見せてくれます。私達にとってこの季節がもっとも楽しいのは、夏鳥たちに会えるからでしょう。このことは毎年くり返されてきたことですが、最近、全国的に異変がおきているらしいのです。ブッポウソウが少なくなったとか、センダイムシクイのさえずりを聞かなくなったという話をよく耳にします。夏鳥が急激に減っているらしいのです。その原因として、熱帯雨林の急激な減少が考えられています。



サンコウチョウ

野山に鳥たちがいてこそ、私たちは観察を楽しむ活動できます。だから、もし本当に減っているのなら、その減少をくい止める手だてが必要です。しかし、各方面に訴えていけるほど十分な証拠は、まだほとんどないというのが実状です。証拠となる資料には、次のようなものが必要です。

(1) 過去におけるセンサス（個体数）調査資料

(2) 過去の調査と同地域の、ほぼ同じ時

期、時間で調査した資料(1)と(2)とを比較する事より、夏鳥が減ったかを確認できるわけです。

そこで、昨年試みに、三条市月岡と黒川村奥胎内の2カ所で調査してみました。図1は、三条市月岡の標高の低い丘陵地の道沿い3kmでの調査結果です。環境は二次林や杉林ですが、最近はあまり伐採されていません。過去のデータは渡辺央さんのご厚意で使用させていただきました。

1978年5月28日に行われた調査では、30種209個体が確認されました。17年後の1995年5月27日の今回の調査では、29種194個体が確認されました。種数は1種減り、個体数は15羽減りましたが、あまり大きな変化はありませんでした。

増加した種は17種で、夏鳥はツツドリ、イワツバメ、ヤブサメ、キビタキ、オオルリ、サンコウチョウ、ノジコの8種類でした。特にノジコ（3羽増）とクログミ（4羽増）は大きく増加しています。変化しなかった種は2種で、夏はホトトギスの1種でした。減少し



キビタキ

三條市・月岡		78 5. 28	95 5. 27	増 減	
1	カルガモ	1		-1	減
2	トビ	2		-2	減
3	サシバ	2	1	-1	減 夏鳥
4	キジ		1	1	
5	キジバト	13	1	-12	減
6	アオバト	1		-1	減 夏鳥
7	ツツドリ		2	2	夏鳥
8	ホトトギス	1	1	0	夏鳥
9	カワセミ		1	1	
10	アオゲラ		1	1	
11	コゲラ	7	4	-3	減
12	ツバメ	5		-5	減
13	イワツバメ		1	1	夏鳥
14	キセキレイ	4		-4	減
15	サンショウクイ	12	5	-7	減 夏鳥
16	ヒヨドリ	34	35	1	
17	クロツグミ	6	10	4	夏鳥
18	ヤブサメ	3	5	2	夏鳥
19	ウグイス	5	5	0	
20	メボソムシクイ		1	1	
21	センダイムシクイ	5	2	-3	減 夏鳥
22	キビタキ	6	10	4	夏鳥
23	オオルリ	5	6	1	夏鳥
24	コサメビタキ	1		-1	減 夏鳥
25	サンコウチョウ	5	8	3	夏鳥
26	エナガ	4		-4	減
27	ヤマガラ	9	14	5	
28	シジュウカラ	7	4	-3	減
29	メジロ	22	19	-3	減
30	ホオジロ	16	8	-8	減
31	ノジコ		3	3	夏鳥
32	カワラヒワ	16	3	-13	減
33	イカル	1	10	9	
34	スズメ	4		-4	減
35	ムクドリ	6		-6	減
36	カケス	4	3	-1	減
37	ハシボソガラス	2	28	26	
38	ハシブトガラス		2	2	
	種数	30	29		
	個体数	209	194		

図1 三條・月岡

黒川村・奥胎内		81 6. 9	95 6. 10	増 減	
1	オシドリ	2	*	-2	減
2	サシバ		*		夏鳥
3	ヤマドリ		*		
4	ジュウイチ	1		-1	減 夏鳥
5	ツツドリ	5	1	-4	減 夏鳥
6	ホトトギス		*		夏鳥
7	コノハズク	1	*	-1	減 夏鳥
8	ヨタカ	1	*	-1	減 夏鳥
9	ヤマセミ		*		
10	アカショウビン	3	1	-2	減 夏鳥
11	ブッポウソウ	4	*	-4	減 夏鳥
12	オオアカゲラ		3	3	
13	アオゲラ	2	*	-2	減
14	アカゲラ	1	*	-1	減
15	コゲラ		*		
16	キセキレイ	5	1	-4	減
17	ヒヨドリ	5	3	-2	減
18	カワガラス	1	*	-1	減
19	ミソサザイ	4	*	-4	減
20	クロツグミ	1		-1	減 夏鳥
21	ヤブサメ	3	*	-3	減 夏鳥
22	ウグイス	18	2	-16	減
23	センダイムシクイ	9	2	-7	減 夏鳥
24	キビタキ	27	18	-9	減 夏鳥
25	オオルリ	9	6	-3	減 夏鳥
26	コサメビタキ	1		-1	減 夏鳥
27	エナガ	2		-2	減
28	コガラ	1		-1	減
29	ヒガラ	1	*	-1	減
30	ヤマガラ	2	7	5	
31	シジュウカラ	13	9	-4	減
32	ゴジュウカラ	2	*	-2	減
33	メジロ	1	3	2	
34	ホオジロ	8	4	-4	減
35	カケス	1	2	1	
36	ハシボソガラス	1		-1	減
37	ハシブトガラス	2	2	0	
	種数	31	15		
	個体数	137	64		

*印は調査時間外で確認

図2 黒川村

た種は19種類で夏鳥はサシバ、アオバト、サンショウクイ、センダイムシクイ、コサメビタキの5種でした。この中で特に、サンショウクイ（7羽減）とセンダイムシクイ（3羽減）が大きく減少していました。



サンショウクイ

留鳥では、ヤマガラ（5羽増）とイカル（9羽増）は大きく増加した一方、ホオジロが8羽減り、カワラヒワやキジバトは12～13羽減少しています。これらの減少は、入口の田畑が埋め立てられ駐車場や野球場に変わったことが影響しているのかもしれません。

図2は奥胎内の調査結果です。ここは標高500～600mのブナの自然林です。過去のデータは野鳥愛護会が1981年に行った県内各所の生息状況調査報告を使用しました。1981年6月9日の3kmの調査では、31種137個体が確認されました。14年後の1995年6月10日の今回の調査では、15種64個体が確認されました。種数は16種減り、個体数は73羽減と大きく変わりました。

増加した種は4種、変化しなかった種は1種でしたが、夏鳥はありませんでした。減少した種は27種で、夏鳥はジュウイチ、ツツドリ、コノハズク、ヨタカ、アカショウビン、ブッポウソウ、クロツグミ、ヤブサメ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキの12種でした。この中では特にツツドリ（4羽減）、ブッポウソウ（4羽減）、ヤブサ

メ（3羽減）、センダイムシクイ（7羽減）、キビタキ（9羽減）、オオルリ（3羽減）が大きく減少しました。ただし調査コースの約半分は道路拡張のため工事が行われており、この影響があるのかもしれませんが、しかし、その一方で、留鳥のヤマガラ（5羽増）とオオアカガラ（3羽増）は大きく増加していました。もっともウグイス（16羽減）は極端に減っていました。

これだけの結果からではまだはっきりしたことは言えませんが、センダイムシクイやサンショウクイのような種では危機的な状況にあるような気がします。しかし、地域によっていろいろの条件が加わってくるので少しの調査例で結論を出すことはできません。そのためもっと多くの場所で調査する必要があります。

幸い県内では各地で多くの方々により、しっかりしたセンサス調査が行われてきており過去の様子をつかむことができます。それをもとに今後再調査を行えば、県内の夏鳥が減少しているか、はっきりした傾向をつかむことができると思います。



オオルリ

このような調査研究は今後、東京大学の樋口広芳氏を中心に全国的に進められる予定です。そこで県支部では毎年繁殖期に県内の森林調査を実施し、情報を交換しながら県内の夏鳥の状況を調べていこうと考えます。

佐潟がラムサールに登録、その意味を考える

豊栄市 藤田 英 忠

1993年に北海道釧路市で水鳥とその生息地を保護するための条約、ラムサール条約の第5回締約国会議が開催された。このことは本誌のNo.37に福原毅会員が一般参加者として出席され、寄稿されている。

この時も福原氏は会議の性格上からも国内NGOがもっと強く積極的に意見を述べ、発言してもいいではないか、新潟県は潟を県名にしているのだから、この湿地(潟)保護に全国のネットワークの中心的な役割をはたしてもいいではないか、と言明しておられる。同感である。

潟は県民の生活にとって、その歴史を振り返れば敵であった。潟がなければどんなに生活や農業がうまく回転していったかは行政サイドの映画「葦沼(あしぬま)」を見るまでもなく県民は痛いほどわかる。そして、先人は水と闘い、水に苦闘してきた。敵であった時代だ。

しかし、この映画が主張しているように、潟を改革しながら全国で有数の農業県になってきた事実は、敵を人間の側に利用してきた歴史でもあった。新潟県はその地理的条件から、いつでも山から谷から川から海からそして平野の潟からも水を得られる利点で、農業・漁業・工業・電力供給を発展させてきた。その結果の程よい自然に、都会から赴任してきた友人は、再度都会への転勤命令に泣いていた。

私は、今の新潟県の自然が大好きだ。何も人の手が全く入っていない自然は理想的な自然ではないと思っている。人の手によって作りだされた部分とそうでない部分がうまく調和している自然が理想であり、そのところ

にもっとも近いところにいるのが新潟県であろうと、一人ほくそ笑んでいるのである。

さて話を潟に戻してみれば、これ以上は潟を人間サイドに改変しないでもらいたい。敵であったのは過去の先人の歴史である。これを利用して人間生活にその恩恵を受けてきた歴史もまた長かったはずである。今度はシギ・チドリ・ハクチョウ・ヒシクイ、昆虫や貝や野草たちにもその恩恵を分けてあげたらどうなんだと言いたい。彼らもやはりきれいな水や豊富なエサ、踏み付けられない生活域や鉄砲を発射されない安心できる場所を欲しがっている。そして、何よりも、水鳥たちは自分たちが憩い、子育てをしている、この美しい風景を人間たちにも見てほしいのではあるまいか。

多くの人間が、自然保護なんていうものに目を向け始めた歴史はここ20~30年ほどである。どうして目を向け始めたか。

それは、人間の20世紀までの歴史が自然



図1. 佐潟と周辺の地図

を全く敵とした人間のエゴイズムの歴史でもあったからにはほかならない。そして水の惑星地球が今、人間の膨張と人間の無秩序によって死の危機に瀕しているのではないかと騒ぎ出す人たちがやっと出てきた。これも20世紀である。しかも、この人たちは地球という生きている肉体を、人間という癌細胞が侵している、と訴えているのである。(癌は無秩序が増えて、人の肉体を蝕んでいき、やがてその肉体を死に至らしめる。増えるだけが使命かのように。)

こんな重要なことに気がついていても、人間はこれをどうしていいのかわからない。それは他の生きものたちと一緒に生きる経験が近世の人間たちにはなかったからだ。殺戮と産業革命の歴史の時代の先人たちには、学ぶ対象がなかったからだ。

人の終末を振り返っても、癌とエイズが死因の群を抜いて増加しつつある今日、我々はいったい何をここから気が付いてきているのであろうか。それは、癌やエイズ「を退治」ではなく「と共生」していくことがベターとしていく論理である。即ち、調和の重要性である。何と、学ぶ対象が自分の生かされている肉体であり、終末の自分なのである。

健康な身体は細胞たちが、実に調和を保ちながら、オーケストラのひとつひとつの楽器のように全体を意識してハーモニーをつくりあげている、と科学者ラブロックは言っている。癌細胞やエイズの侵入・発病を全体の調和の力が押さえているのである。

話をもう一度潟に戻そう。潟に生きる水鳥や昆虫たちと一緒に生きていける、その実現こそ20世紀の県民が残した21世紀への課題であり(お荷物かもしれないが)宿題なのだと思う。

以上の観点から、新潟県人がラムサール条約を考えてみると、たとえば佐潟の条約登録はこの日から世界の知識人、意識あるNGO、学者研究者からいろんな参考意見や情報を受

け、佐潟が人を含めた生きものたちと、共生・調和をもった健康な身体として21世紀に伝え残す指針が与えられ、佐潟にかかわる人たちはこの観点で生活と活動と学習ができ、生き生きとしたライフワークが保証されるのである。そして、人として恥ずかしくない生き方ができるのである。

ラムサール条約登録の経緯とその後をいろんな湿地で聞かされていることは、人と潟の利害関係ばかりである。つまり人にとってラムサールは迷惑である、の一点張りである。もし今も県人がその観点からしか考えられないとすれば、今度はなかば強制的に行政サイドから条約登録をはたらきかけていかなけれ

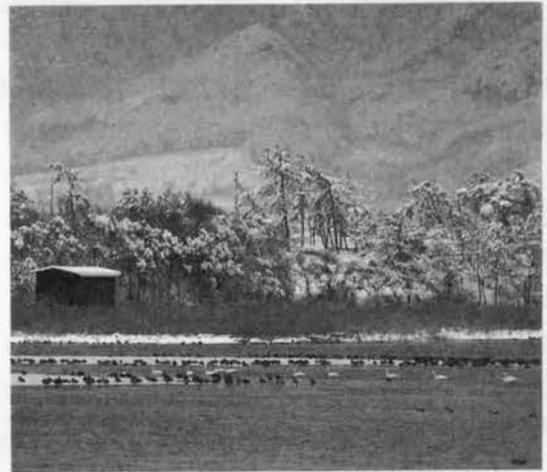


図2. 厳冬季の佐潟(背景は角田山)

ばならない、という情けないことになっていく。私はこの種のことは、民間(NGO)の熱意と理解が実を結ばないかぎり本来の意味がない、と思っている。そうでないと行政指導型では、今後のあるべき姿を模索していくとき、そこに关わる人間集団の力にならないし、学習もしない、不満と迷惑であった、という発想の繰り返しで終始してしまう懸念をもつからである。

しからば、佐潟はどうであったか。福島潟はどうしたか、を述べてみたい。

佐潟はどちらかといえば、行政主導型であ

ったようだ。しかし、継続中の福島潟と違ってたぶんラッキーであったと思われる点が二つある。

1点は環境庁はラムサールの場合、国内法による湿地保全の担保として二つの網をかけ、そのいずれかをクリアーしていなければ、条約登録をしないことになっている。それは国設鳥獣保護区に特別保護地区指定があるか。もう一つは国定公園または国立公園の特別地域に指定されている、かである。佐潟は後者の国定公園であったことが網かけをクリアーできていた。福島潟は国設鳥獣保護区どまりである。2点目は地元赤塚地区が最初の説明会が平成7年7月、2回目が9月で、すでに国定公園指定時より新たな規制が加わらないことを理解してくれたことだ。福島潟の場合、なかなか地元がこのことを理解してくれず、新たな規制に対する不安感を表し地元の利害関係者たちが反対を表明している。

もともと、この条約登録は国際間における自然保護・野生動物保護の日本の関心と責任感がいかにあるかを位置づけるバロメータ的なものでもあり、最終的には環境庁・外務省が湿地の選定から推薦・登録をラムサール事務局へ通達する。しかし、これはNGOの世界的な団体W・W・F Japanの大きな関心でもあり協力もある。従って、環境庁は行政サイドを通じて県・市町村へ推薦の打診をしてくる。しかし、当該市町村は国の考えている様なレベルの問題ではなく、その生活に密着している湿地を国に盗られるかのように思われる問題としてラムサールに直面する。

佐潟はこの地元との関係も割合スムーズいき、行政と地元の互いの湿地保護の理解がうまくいったケースである。

他方、谷津干潟のラムサールのように、民間の保護団体が繰り広げた、自然保護の戦いの中から勝ち得たラムサールを知らされるとき、ラムサール条約にもっていくことができ



図3. 佐潟に憩うコハクチョウの群れ

るケースには大きく三つある。(1)佐潟的な場合、(2)谷津干潟的な場合、(3)福島潟的な取り組み、である。

福島潟は今、地元の利害関係で交錯している糸をときほぐしつつ、地元の人々が納得いった形の人間の利益を追求しない水鳥たちの利益を最優先する、そんな潟にするために辛抱強い話し合いと学習会とを展開している。それはありきたりの自然保護ではない、人と潟と水鳥たちの調和のとれた共生の潟をつくっていきたいと考えている。それにはぜひともラムサール福島潟が必要と確信している。



豪州からのたより

南魚沼郡塩沢町 木下 弘

今冬、ガンカモ調査を行った1月15日の翌日に海外から私宛に便りが届いた。ウォンバットの切手から、すぐマッカーシーさんからだとわかった。

今から5年前の'91年2月にけさじろ荘で日豪バードウォッチャーの集いが行なわれた。23日(土)の夜行った「豪州の自然のスライドによる説明会」翌24日(日)には信濃川での「冬鳥探鳥会」に参加し、またその6月には南魚・塩沢町清水での野鳥の会県支部総会に参加して翌日巻機山頂まで登って来た青い目のバードウォッチャー夫妻のことを記憶されていることと思う。

熱心な愛鳥活動家マッカーシーご夫妻と知り合った経緯と近況についてお話します。

私が、バードウォッチャー夫妻と知り合ったきっかけは、前任校の教務室に1冊の本を手にもって入ってきたマーガレットさんとの出会いからだった。AFTとして初対面の日、ザックを背負い手には見慣れた表紙の英語版の本“A FIELD GUIDE TO BIRDS OF JAPAN”を持っていたのを発見。私はシャ

イな人間で金髪女性など見ただけでも胸が高鳴り、とても英会話で話しかける勇気も語学力も無かったのであるが、いま考えると、私自身大冒険をよくもしたな、と赤面してくる。

只、私にあったものは“フィールドガイド日本の野鳥”を私も持っているという共通点だけだった。“私が新潟県のトリのことなら多少知っているよ。”ということもマーガレットさんに伝えたくて、清水の舞台から飛び降りるような気持ちで、新潟県関係のトリの図鑑や写真集などを机上に並べてカタコト英語のトリ交流がスタートした。英語科の助けを借りずに新潟市在住のトリ仲間の佐藤弘さんにいろいろ無理なお願いをして新潟海岸での標識調査を行っているところへガイドしてもらったり、長岡でのバードウォッチャーの集いも全部通訳を頼み、会の運営までも一方的にお願いした。あいにく信濃川での冬鳥探鳥会はものすごい暴風雪で実施できず、長岡博物館の鳥類標本展示物の見学を行って青い目のバードウォッチャーとの交流を行った。

マッカーシーさん御夫妻は、'90年の9月に来日して以来、福島潟、谷川岳、磐梯山、大聖寺鴨池、鹿児島県出水市荒崎、広島県宮島、富士山、レンタカーで北海道を回って大雪、根室、釧路、ウトナイを探鳥、十日町から日帰り東京明治神宮内苑の池にオシドリ観察……ほとんどが定期路線の交通手段を利用して休日のすべてを夫婦で日本国内の探鳥に費やした。7月25日に成田から帰国したが途中香港のマイボ・サンクチュアリーに立ち寄って探鳥する熱烈なバードウォッチャーだった。

その後'92年の5月に長男ライアン君が誕





生したり、御主人の仕事が変わったことなどで大変に忙しかったようだった。今回来届いた便りでは、御主人は国立公園の事務管理部の部長として公園計画立案の責任者となり、奥さんは、同じ国立公園管理ビル内階下の林務手続を行う森林協会です仕事をしているそう。長男ライアン君はもう少しで4才になり、妹のカイトリンちゃんは18ヶ月で託児所に預けて仕事をしているために、とてもバードウォッチングする暇は無いそうだ。

私はマッカーシーさん御夫妻の熱烈バードウォッチングぶりからいろいろのことを学んだ。まず、1年間も仕事を休んで現地のガイド等を頼らずに徹底的に日本の自然を求めて自力で行動するバイタリティーに驚いた。そして、地味で謙虚に自然とふれて楽しむ姿勢を見習わなければと強く感じた。たまたま私がケガをして学校を少し休んだ時にも、わざわざ見舞い状をくれるなど心細かい思いやりにビックリした。

交流をとおして、あらためて日本人が自分たちが住んでいるごく身近な自然の四季折々の変化に富んだ豊かさに気付かないで毎日過ごしていることが勿体ないと思えてきた。

一見豊かな生きものたちでいっぱいのおーストラリア大陸といってもたえず発生する野火のために貧弱な植物相しか育たず人間の活動を厳しく管理し、制限していかなければた

ちまち絶滅してしまうそうだ。たとえ民有地内に生えている庭木であっても直径10cm以上のものを伐採するには許可が必要という国柄である。そういったきびしい管理の下で、他の大陸とはかけ離れて進化をとげた生きものたちの楽園が存続していることを知った。そんな豪州にも日系企業が侵入してパルプ原料として大面積の森林が破壊されていることが新聞の声欄にオーストラリアの自然愛護団体からの投書が載っていた。琴鳥（ライアバード）保護協会などのように民間愛鳥家によるボランティア活動もさかんで誰もが自然を愛する国民性が根底にあるようだ。長岡での日豪スライド会で見つめたメルボルン郊外での探鳥会風景…赤ちゃんを背負ったお母さん、お父さん、家族揃ってのピクニックのようなゆったりと自然とのふれあいを楽しむ風景…が印象的だったが、今、ライアン君とカイトリンちゃんをつれてバードウォッチングしながら、“お父さんたち日本で探鳥してきたんだよ”と話しかける様が浮かんでくる。

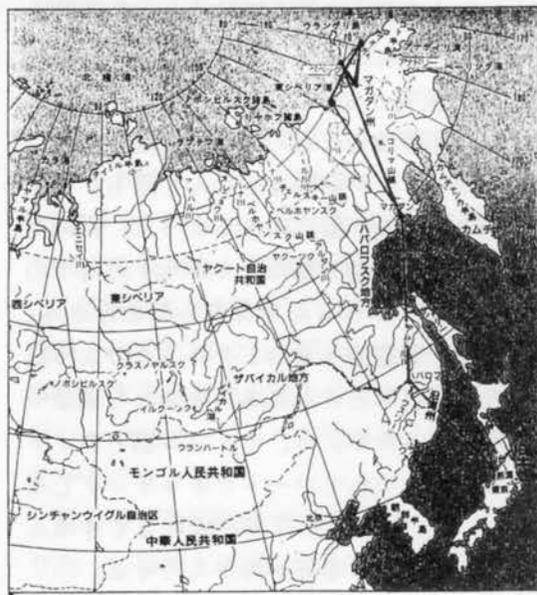
庭の片隅に日本庭園を造り、御主人からマーガレットさんへのプレゼントの石灯籠を置き、カエデ（鉢植え）を植えて日本の自然探索の思い出にしているということだ。

ゆったりと自然とのふれあいを楽しむ風景…これからの日本の自然を保護していく上で大切なことではないかと豪州からのお客さんから学んだ。



白夜の中の鳥たち (I)

南蒲原郡栄町 渡辺 央



会議終了後の懇親会の席で、支部報の原稿集めがあちこちで始まっていた。やがて、今回編集担当の小林成光氏が、銚子をもって私の処にやってきた。そして言う。ロシア北極圏の旅行について、鳥の話はいいから、ロシア美人の話を書いてくれ。酔いも回っていたこともあって、承諾したのか、しないのかも分からなかったが、後日また電話がきて、ロシア美人談1頁宜しく頼むとのこと。承諾してはみたものの1頁である。この旅行中に会った魅力ある彼女、彼女……と書いて行くとともにこの頁数では終わらない。そこで、もし許されるなら、今回を1回目として順次紹介させてもらいたいと思う次第である。

新潟からハバロフスクへ

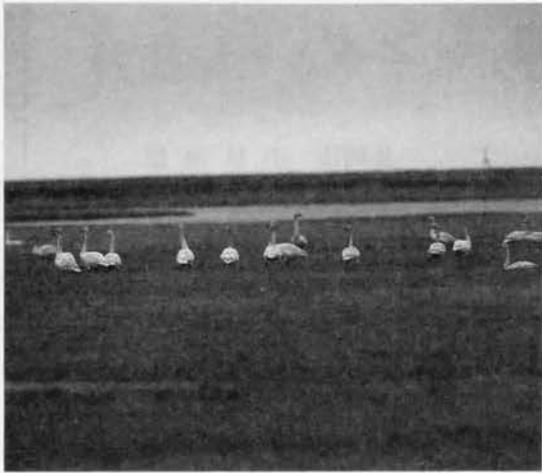
1994年の夏は暑さが厳しかった年である。新潟も連日うだるような暑さが続いていた。

その7月1日、新潟空港に日本白鳥の会の本田清さんを団長とする9人の面々が集まった。北へ3500キロ、コハクチョウ、ユキホオジロ、コオリガモ、キョウジョシギなどが繁殖するツンドラへの15日間の旅立ちのために。15時30分、アエロフロート機で曇り空の新潟空港を飛び立ち、機内で時計の針を2時間進め、19時13分小雨降るハバロフスク空港に到着した。機内の窓越しにチョウゲンボウだろうか、滑走路脇の上空で盛んにホバリングしているのが見えた。空港からホテルまでは、ヤマナラシの並木、レンガ造りの建



ハバロフスクからマガダン空港に着いた参加メンバー

物、その背後に見え隠れする原野など、北の街をマイクロバスで行く。ホテルは日本人観光客も多かった。午前2時まで開いているというホテル1階のバーは、若いハバロフスク子で満員であった。ロシア経済の事情はいろいろ聞かされていたが、ここ数年のうちにハバロフスクのような都市ではかなり物も豊かになってきていると言うことであった。私はこの小さな売店で、ミネラルウォーター1



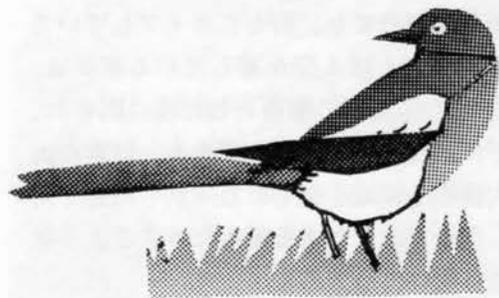
目的地はコハクチョウの繁殖地

リトルびん1本、ビールの小瓶2本を買った。合わせて9900ルーブルであった。日本の100円が丁度1000ルーブル位である。このハバロフスクでの滞在時間は短くて、明日の午前4時には次の中継地マガダン空港に飛ぶ予定になっている。ビールの飲み不足であまり眠れないまま集合時間の午前1時30分になり、暗いハバロフスクの街を再び空港に向かう。雨は降っていないが、天気はよくないようだ。古いバロック風の大きな空港ビルの待合室には我々の他にはロシア人の家族だろうか、4人ほどがいるだけで、我々が入ると初めて電灯がつけられた。午前2時である。荷物の計量や検査、ボディチェックが行われる。この真夜中の仕事を若い2人の女性係官でやっている。3時20分、その係官が来て言うには、マガダン空港が霧のため8時頃まで飛行機は飛ばないらしい。この国では4時間位の遅れで腹を立ててはいけない、帰りのマガダンでは12時間遅れたのだから。しばらくしてまた係官がきて言う。5時に飛行機が出ると。しかし、6時になっても何の連絡もない。外がようやく白み始めた。霧雨が降っていて、寒々している。飛行機はまだ出そうもないので、双眼鏡をもって建物の外に出てみる。空港前のヤマナラシの林からは、カサ

サギの声が聞こえる。4~5羽はいるようだ。ハバロフスクの街ではよくみられる鳥である。足元を見るとヒナ連れのイエスズメがいる。私は初めてみるこのスズメにまず最初の感激をした。次に建物の玄関天井をみるとロシアカツバメと思われる巣がびっしりと作られている。ツバメは1羽も見なかったが、その巣のいくつかを日本でもおなじみのスズメが利用していた。6時35分突然飛行機が出るという連絡が入る。荷物をもって送迎バスに、飛行機に乗り込み外を見ると、カササギが1羽飛行機が並ぶ空港内まで入り込んでいた。午前7時、いよいよ北極圏の入り入口マガダンに向かって離陸した。北へ2時間30分の飛行である。



ハバロフスクのホテルからアムール川を望む



アトランタ鳥ミング

長岡市 小林 高臣

アメリカ南部に位置するジョージアの州都アトランタは、日本では、マーガレットミッチェルの“風と共に去りぬ”で印象深い。私は、家族とともに、幸いにも1年間、このアトランタで暮す機会に恵まれた。最近、日本にいても今夏のオリンピックでアトランタをちょくちょく見聞きする機会がある。帰国してからもアトランタがたびたび紹介されなつかしく思う。渡米する前は、南北戦争の時代の“風と共に去りぬ”の印象があまりに強く、大豪邸と綿畑だらけと思っていたが、所々に古き良き南部に触れることができるものの、今では、この南部の町は、ダウントウンには高層ビルがそびえ、片側6車線もある高速道路が縦横無尽に走り、周辺の物流が集中する大変活気に満ちた都市である。車中心の社会であるにもかかわらず、排気ガスが全く苦にならなかったのは、おそらくこれらの樹々のおかげであろう。私は、アトランタカウンティ（郡）の隣、デカルブに居をかまえた。近くには観光地のストーンマウンテンがある。ここは、ナショナルパークになっていて、休日には、ハイキングやキャンプができる。このてっぺんに立つと、本当に樹海がどこまでも続く景観を目にすることができる。ここからながめても、街をドライブしていても、気づくことは人間が暮している家々は、20~30mの広葉樹の鬱蒼とした森に囲まれ、その下に点在していることである。日本のように大規模造成地を創るため何から何まで丸裸にした後で、また木を植えたりするようなことはしないようである。

アトランタで初めて見た印象に残る鳥といえばジェイ (Blue Jay) である。ジェイはカ

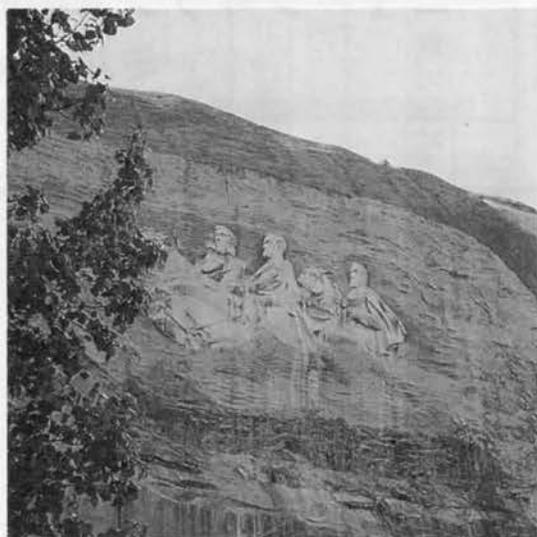
ケスの仲間で、名前通り“ジェイ、ジェイ”と鳴く。生活に慣れてくると頻繁に見ることができ、木々の間をゆっくり飛んでいる。が、初めてみたときは、おながの水色よりも鮮やかなそのブルーの色合いには感動した。これがきっかけとなって、私が愛用することとなる Eastern Birds 図鑑と双眼鏡を買うことになる。キツキもまた、種類も数も多く、私は5種類みかけた。まず良く見るのはアオゲラの背中にアカゲラの頭をつけたような Common Flicker と Red - Bellied Woodpecker である。それと、コゲラの仲間の Red - Cockaded Woodpecker も多い。また、Red - Headed Woodpecker は名前の通り、頭から胸部にかけて真っ赤なコゲラで、これまたたいへん綺麗である。さらには、この街の中で驚いたことにゴジュウカラの仲間の White - Breasted Nuthatch をも見るこ



とができた。日本ではカケスですらあまり見られなくなったが、こんな街中でみれるのも、やはり鬱蒼とした森の恵みであることは言うまでもない。

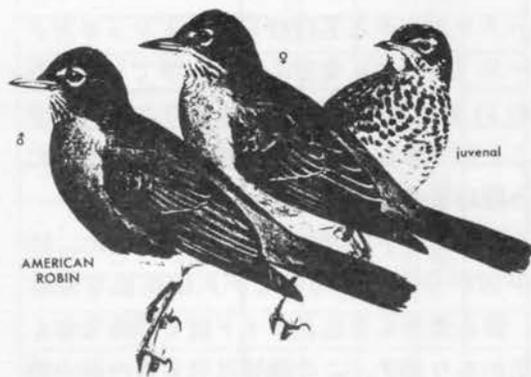
私が渡米したのはちょうど4月であり、若葉がもう繁り、鳥たちは巣作りにいそんでいた。中でもちよくちよく目に付いたのは、人なつこく大きな目のアメリカンロビンである。丁度、ツグミがちょろちょろと小走りに動き、ずっと立ち止まり、辺りをきょろきょろ見回す光景を連想すればいい。アメリカ人は本当にロビンが好きだ。それもこの人なつこささと愛らしい仕草からと理解できる。若葉が繁り終わり、丁度初夏に近づくと、職場の回りに、鮮やかな真っ赤なホオジロがいることに気づいた。Summer Tanagerだった。また、真っ赤な鳥と言えば、カージナルス(Cardinal)を忘れてはいけない。雄は頭が立ち、嘴から尾の先まであざやかな赤で、梢で鳴く声も心地よい。これも初夏から冬にかけてずっと見ることができた。青と赤の鳥を紹介したが、全体が黄色のフィンチ(American Goldfinch)もハイウエイから見渡せるとうもろこし畑で見かけた。さらには、カワセミのコバルトブルー色に覆われたインジゴBuntingなど、日本ではなじみの浅い原色の鳥には驚かされた。また、見通しの良いハイウエイ沿いではノスリによく似ているRed-Tailed Hawk、Broad Winged HawkやオオタカのようなNothorn Goshawkがネズミや蛙を捕獲している光景を目にした。

一年を通して、暖かく暮しやすいが、私が滞在した年(1994-1995年)は、冬には、それでも2回ほど雪が降った。そして春の訪れとともにキャンドルの炎の形をした梨の仲間(Pear Tree)が、まず白い花を咲かせ、それからドッグウッド(はなみずき)が咲き乱れ、本当に綺麗だった。この頃になると、冬の間頻繁に見れなかったロビンがまた見れるよう



南北戦争で功績のあったリー將軍の彫刻が刻まれた全山花崗岩のストーンマウンテン

になり、ジェイの鳴き声で目を覚ますようになる。アトランタで暮した1年間は、今思うとあつという間であった。アトランタは急速に発展膨張し、いたるところで造成工事、道路工事をしていた。日本に帰国した今、いつまでも広葉樹の鬱蒼と繁った森と調和しながら発展してほしいと願っている。

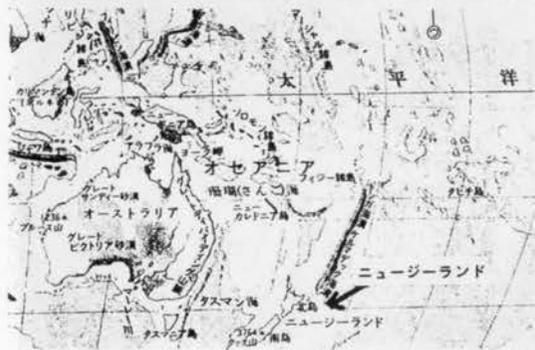


アメリカンロビン (Eastern Birdsより)

ニュージーランドの旅

ミルフォードトラックを歩いて

長岡市 末崎 朗



ニュージーランドは面積268,808km²、人口約350万人、主に北島と南島の2つの大きな島からなり、日本の約70%の国土に約3%の人口といううらやましい?国です。羊の放牧でも有名で、人間の数より羊が多いと言われるわりにはラグビー、ヨットなどで世界トップレベルの活気のある国でもあります。そんなニュージーランドでもう一つ有名なものは豊かな自然。12の国立公園の面積を合わせると国土の10%近くにもなり、そこを訪れる観光客は世界中から集まってくるの。私はそんな国立公園の中の一つ、南島のフィヨルドランド国立公園、その中のミルフォードトラックと名付けられたトレッキングコース（登山道）を歩くことが夢でした。昨年11月に念願がかなってそのコースを歩くことができたので、その様子を記してみたいと思います。

ミルフォードトラックは全長約54km、10月中旬から4月中旬までが入山可能な期間で、個人で歩く方法とガイド付で団体で歩く方法があります。この地域は日本の白神山地や屋久島と同じように世界遺産条約の指定地で、1日80人までに入山が規制されています。コースの始まりと終わりは船でなければ行き来できず、厳しい規制が行われていま

す。そのコースは、クリントン川に沿って下流から上流方向にさかのぼり、標高1,073mのマッキンノン峠を越え、アーサー川を今度は上流から下流へと下って、ミルフォードサウンドという有名な入江に向かう一方通行のコースです。

ミルフォードトラックの初日は快晴でした。ただし、この日は船を降りてから1km歩くだけ。山小屋に到着後近くを散策。綺麗なクリントン川に感激するとともに、サンドフライと呼ばれる大型の蚊に悩まされました。虫よけのクリームを塗ってないとたちまち刺され、刺されると非常にかゆい。

私が参加したガイド付ツアーは日本人が多く、そのほとんどは50~60才代の人達でした。海外からは、イギリス、ドイツ、オーストラリアなどからいずれも女性1人の参加で、その行動力には、驚かされました。後でその方達にカタコトでお話を聞くと、いずれも3週間から4週間の休暇をとっての参加で、日本の現状と比べてうらやましく思いました。

二日目は、クリントン川に沿ったブナの原生林の中を歩いて、氷河で削られたU字谷の



シダの繁茂する林

底へと向かうコースで、期待に胸をふくらませていましたが、朝からあいにくの小雨でした。それでもそのコース中で様々な鳥を観察することができました。風変わりな声のベルバード、人なつっこいヒタキのトムティットとブッシュロビン、キクイタダキのようなライフルマン、いたずらもののオウムのケア、鮮やかな色彩のツクシガモ類パラダイスシェルダックなどです。これらの鳥を育む森は素晴らしく、樹齢何百年というブナの原生林は文字通り人の手が一度も加わっていないようです。何よりも日本の森と違うのは、木の幹にびっしりとついたコケと林床のシダ類の多さです。ニュージーランドでもこの地域だけなのかもしれませんが、森の中までも一面びっしりと緑色に見えるのは、降水量がかなり多く、湿度も高いからなのでしょう。さらにU字谷の底へ出ると違った景観が広がりました。私達の歩いている谷底の部分はかなり広く、幅にして2~300m位はありました。両側の山はほぼ絶壁状で、底からの高さは1,000m程もありました。山からは所々細い筋の滝となって水が落ちてきます。絶壁上の急斜面の岩山には不思議とかなり高い所まで木が生えていました。また、時折コース上に枯れ木や土砂が押し出してきました。これについてガイドの方の解説を聞くと、この現象はツリーアバランチ（木のなだれ）と呼ばれていて岩山上の林の成因と密接に関係していました。岩の上にも、先程通ってきた森と同じようにびっしりとコケがついて、それらがやがて厚く積もって養分のある土壌となり、そこに木が生え、やがては林となる。ところが林が成長すればするほど土壌であるコケの部分にかかる重さは増し、下の岩との境に大量の水が流れるとなだれのように一気に谷底へ押し出すとのことでした。これは何百年の周期で起こることで、スケールの大きな自然現象に感動しました。

三日目は、マッキンノン峠越えの日で、行



いたずらもののケア

程中一番ハードな日でしたが、朝から大雨。日頃の行ないの悪さを後悔しても始まらず、完全装備の雨具に身を包み、黙々と峠を目指しました。晴れていれば素晴らしい眺望が望めたはずでしたが、峠の頂きに着いてもガスの中。そこにある小屋の中で頂いたコーヒーやスープのおいしかったこと。ただその付近に咲く高山植物のマウントクックリリーの純粹な美しさは強く印象に残りました。峠を下ると雨はやみ、雨具のフードをおろして歩くことができました。木を覆うコケは一層増え、独特の景観を造り出していました。そんな木々に囲まれたアーサー川の溪谷は例えようもなく美しく、緑に囲まれたダイナミックな滝に何度もカメラのシャッターを押しました。滝と言えば、その日の宿の山小屋に荷物を置いた後、高さ580mのサザーランド滝も見に行きました。その水量、大きさ、音、すべてに圧倒されました。

四日目は朝から雲が切れて晴。標高1,800m級とそんなに高くはないのですが、その上部に美しい雪、氷河を抱いた山々を眺めながら、いくつもの吊橋を渡る比較的平坦なコースを気持ちよく歩きました。ただ、帰りの船の時間が決まっているため日程中最長の約22kmを少し急ぎ気味に歩かなければなりませんでしたが、午後2時過ぎに無事歩ききることができました。

歩き終わっての感想は、1日80人という厳しい入山規制を行っているだけあって、本当



山を遠望しながら歩く

に手つかずの自然を体感できたなと思いました。一方、厳しい自然環境を相手にして、コースや小屋などの施設の維持管理はかなり大変な事が実感でき、世界中の人々に自国の美しい自然を見てもらうという意識に支えられたガイドを始め、関係者の御苦労に頭の下がる思いの四日間でした。

ミルフォードトラックを離れて感じた事も少しふれておきたいと思います。広大な国立公園を離れてバスで移動すると羊の国だけあって、街以外はひたすら牧場が広がるのみで、ニュージーランドでも人間の影響の大きさを実感。さらに鳥類図鑑を見れば、ホシムクドリ、イエスズメ（ヨーロッパから）、カナダガン（アメリカから）、コウライキジ（アジアから）などの帰化種も目につき、固有種で飛べない鳥のキウィーやタカへはその数が激減しているそうでした。また、天気の良い日の日ざしは、肌を射すようで、オゾン層の破壊も体感できました。「美しい自然を見て喜んでばかりいてはいけない。日本の現状もよく考えなさい。」ニュージーランドはそんなことも私に教えてくれたようでした。

◎県支部 20周年記念誌

去る2月25日に第1回の記念誌編集会議が長岡で行なわれました。鳥類目録についてはほぼ文献の調査が終了し、各地区の担当者へ依頼しました。また探鳥地案内についても担当者へ依頼しました。3月3日の役員会でも確認され、編集について次の2点については全員に公募することになりました。

- ・ 記念誌のカラーページの鳥の写真について川、海、町、山の鳥に分けて募集します。
- ・ 鳥類目録についても、珍鳥、貴重種などの記録を募集します。

○2月17・18日に東京で評議委員会が行なわれ県支部からは、石部、桑原の2名が出席してきました。詳しくは次号でお知らせします。

○奥只見のイヌワシ保護について

すでに新聞などで話題になっていますが、県支部でも役員会で検討した結果、3月25日に大島支部長と山本保護部長が知事代理の環境保全課長と会い、イヌワシの繁殖地や保護に配慮するように要望書を手渡しました。また4月1日に開発会社の奥只見大鳥増設調査所（小出町）にも支部長から要望書を手渡し、説明を聞いてきました。

発行	1996年3月31日	No.41
発行人	大島 基	編集者 小林成光、千葉 晃、末崎 朗
	日本野鳥の会新潟県支部	
事務局	〒951 新潟市東中通1番町86番地28	
	☎025-229-2018	本間由紀子方 <振替口座> 00610-1-6002